

CSW69参加報告レポート

名前: 金子絵美利

1 自己紹介(100字程度)

金子絵美利と申します。CSW69には新社会人になる直前に参加しました。大学で国際協力を専攻し、スウェーデン留学を機に性教育や避妊アクセスに関心を持ちました。現在はSRHRユースアライアンスでアドボカシー活動を行っています。

2 どのようなイベントに参加したのか。イベントを通して感じたこと、心が動いたこと(500字程度)

今回は私が参加した中で特に印象的だった2つのイベントを紹介します。

一つ目は、フィンランド政府が開催した”Turning Push-Back into Progress”というイベントです¹。ケニア、ウクライナ、フィンランド、スウェーデンの各代表が登壇し、昨今のSRHRへのバックラッシュにどのように対処すべきかについて議論していました。登壇者は、アンチジェンダー(=LGBTQ+の権利やジェンダー平等の概念に反対する運動)に対する教育の重要性を繰り返し強調していました。

特に印象的だったのは質疑応答の際、「女性の身体の自己決定権を制限するような発言」が前日のイベントのQ&Aで出されていたことを念頭に「この会場内でアンチジェンダー的な発言やバックラッシュがあった場合は、運営側で対応する」と事前にアナウンスされていたことです。この取り組みにとても感動しました。一見小さな対応に思えるかもしれませんが、こうした積み重ねこそが、保守的的反動に対抗する姿勢を示す上で重要だと感じました。今回のCSWでは、バックラッシュをテーマにしたイベントが非常に多かったことも興味深かったです。

二つ目は、ARROW²主催の”Asia-Pacific young feminists at the forefront of the BPfA implementation”というイベントです。アジア・パシフィック地域のフェミニストが登壇し、30年前の北京行動綱領を踏まえたアクションについてそれぞれ話していました。各国から10~20代のユースが登壇し、自身の経験を交えながら気候変動や障がい者の視点からジェンダー平等・SRHR推進に必要なアクションを熱心に語っていました。その姿に強く心を揺さぶられました。

またこのような場で文化や宗教観が類似している東アジアの国々がお互いの取り組みを学び合うことで、SRHRの実現をさらに早めることができると感じました。各国の連帯を強化することが重要であると改めて気づかされたイベントでした。

3 CSW69の経験を今後どのように活かすか。今後の抱負(500字程度)

短期的な目標として、来年以降SRHRユースアライアンスでもCSWでユース主導のイベントを開催したいと考えています。上記の通り、日本そして東アジアの国々同士が連帯を強め、国際社会での存在感を高めることが重要です。またCSW中にCenter for Reproductive Rights(米国に本部を置く、リプロダクティブ・ライツにフォーカスした人権団体、)の方と面談した際、来年のCSWでは東・東南アジアの連帯を深めるために共同イベントを開催したいという話も出ました。このように草の根団体同士が連携し、イベント開催などを通じてさらに結びつきを強化していきたいと思っています。

¹ イベントの動画はこちら

URL: <https://www.norden.org/en/pushing-progress>

² ARROWについてはこちら

URL: <https://arrow.org.my/>

加えて長期的な目標として、一つ目に草の根レベルでのアドボカシー活動を行う際、今回のCSWで学んだ世界各国のSRHRに関する視点を反映させたいです。具体的には避妊アクセスの拡充や包括的性教育の公教育への導入を日本でも進めるために尽力します。そして二つ目に、将来は私自身が政治の場でジェンダー平等・SRHR推進のための政策をつくることを目指しています。CSW69では保守派とリベラル派の対立やバックラッシュなど、さまざまな「対立」の瞬間を目の当たりにしました。しかし、私は今後「対立」ではなく「対話」を通じてSRHRを日本でも推進していきたいと考えています。引き続き、楽しみながら行動し続けます！

【写真】



1 CSW69初日の集合写真。国連パスを受け取るために、朝の7時前から並びました！



- 2 Turning Push-Back into Progress(反発を前進に変える)イベントの会場の様子。イベントによっては参加者が多く、満員電車状態になることも...！



- 3 Asia-Pacific young feminists at the forefront of the BPfA implementation(北京行動綱領実行の最前線に立つ、アジア太平洋地域のヤングフェミニスト)イベントでの一場面。聴覚障がいを持つLillian Pengさんが、自身の経験を踏まえて障がい者のニーズに合わせた性教育を進めることの大切さを述べていました。